

コーディネーターだより

令和8年5月
八代市立八代支援学校
文責 楳木

子供たちは日々、私たち大人に様々な形で思いや気持ちを伝えようとしています。その場で理解できたり、要求に応えたりできるものもあれば、大人も驚くような思いや願いを語ったときなどは、大人でも反応に困ってしまうこともあります。そのようなとき、「現実的ではないから」、「先のことを考えると心配だから」と軌道修正を期待したり、ブレーキをかけるように働きかけたりしたくなるかもしれません。

しかし、インクルーシブ教育における「意思の表明」「自己選択」の文脈から捉えると、この瞬間は、子供が主体的に社会とつながり、働きかけようとした最高の「挑戦(チャレンジ)」の瞬間にほかなりません。

子供たちの挑戦を支えることが楽しくなるヒントを探るべく、YouTubeチャンネル登録者数10万人以上の「寝たきりのお笑い芸人・あそどっぐ」として多岐にわたって活動を続ける阿曾太一さんの動画をもとに、3つの視点から掘り下げてみたいと思います。



参考動画
日テレNEWSより

【視点1 実体験の積み上げ】

実際に体を使って動作をしたり、感覚を働かせて感じたりしたことは、物事の意味をよく理解したり、世の中の仕組みを学んだりするための大切な土台になります。あそどっぐさんは、高等部時代に初めて自作のネタを披露し、「笑ってもらえるのが気持ちいい」という実体験をきっかけに、卒業後もヘルパーを相手に地道にネタを作り続けておられます。そして、ネタ動画を配信するために、身体の動かせる部分(口と親指)だけで扱うことのできる形状に工夫された機器を自分で操作し、パソコン画面の動画編集ソフトの表示を見ながら動画作りをされています。

このあそどっぐさんの姿には、「お笑いをやりたい」という思いが芽生えた瞬間から自分で考え、道具や材料を準備し、必要なスキルを身に付け、自分が納得のいくまでやるといったプロセスが存在します。つまり「最初から最後まですべてのプロセス」に「自分が主体」として関わることが何よりの成長につながるものであり、もしも、このプロセスの途中で大人が先に答えを出したり、子供の代わりにやってあげたりした場合、物事の意味や世の中の仕組みを理解するために必要な情報の獲得が断片的になり、実体験が積み上がっていかなかったでしょう。

学習の場面では、「意図的な学び」として場を設定(環境作りや時間の確保)することを大事にしています。例えば、「魚」について教える際、絵や動画を見せるだけにとどまらず、「さ・か・な」の音韻を感じたり、実際に本物を見たり、触れたり、魚が泳ぐ冷たい水を触ったりするような五感を使った実体験を丁寧に積み上げることなどです。これが、子供たちにとって生きた力を育む確かな一歩となるのです。

【視点2 一人一人に合った発信の方法を工夫する】

文章を書いたり、話したりすることが苦手な子供にとっても、動画や画像、文字入力(テロップ)が発信しやすい表現手段になることもあります。一人一人の特性に応じた自由な発信方法を工夫し、伝えることへの興味・関心を伸ばしていくことが大事だと言われています。

あそどっぐさんも、動画を通じたお笑いやメッセージを届けるという「発信方法の工夫」によって、社会とつながっています。

「話せない・書けない」という制限に目を向けるのではなく、「タブレットなら押せる」「写真なら選べる」といった、一人一人の「できる」を工夫し、自分に合った表現手段を見つけることは、「伝える楽しさ」を知るきっかけとなり、これからの成功体験を支える大きな自信へとつながっていくのではないかと考えます。

【視点3 挑戦を続けるための「見通し」と「対話」】

あそどっぐさんの動画の配信頻度は、Youtubeの概要欄に「毎月5のつく日にオリジナルのコントをアップしています!」とコメントされているとおり、無理のない範囲で継続されています。また、批判的なコメントに対する受け止め方もしっかり準備しておられます。

この姿から学べることは、子供たちにとって主体的な挑戦を続けていくためには、「スケジュール(見通し)」をもたせることや、思いどおりにいかない時の「心の準備(折り合いの付け方)」をしておくことが大事だということではないでしょうか。

子供たちが新しいことに挑戦するとき、最初から最後まで全てがスムーズにいくわけではありません。時には様々なルール(社会のマナーや安全上の制限など)に阻まれたり、失敗したりすることもあります。ですが、大人が先回りして「挑戦」を否定するのではなく、子供と対話をして折り合いをつけながら、できそうな範囲を一緒に探すことで、初めて、子供たちの実体験に結びつけることができます。そこでの時間と経験は、子供たちの「次のできるところ」へと進む力になっていくはずですよ。

【まとめ】

子供たち一人一人の思いや気持ちの表出の形は様々です。まずはその小さなサインに寄り添い、できるところからスタートラインに立たせてあげること。そして、自分のもてる力を使って取り組んだという実体験の積み重ねが、子供たちの主体的に考え、生きていく力を育むことにつながるのだと思います。